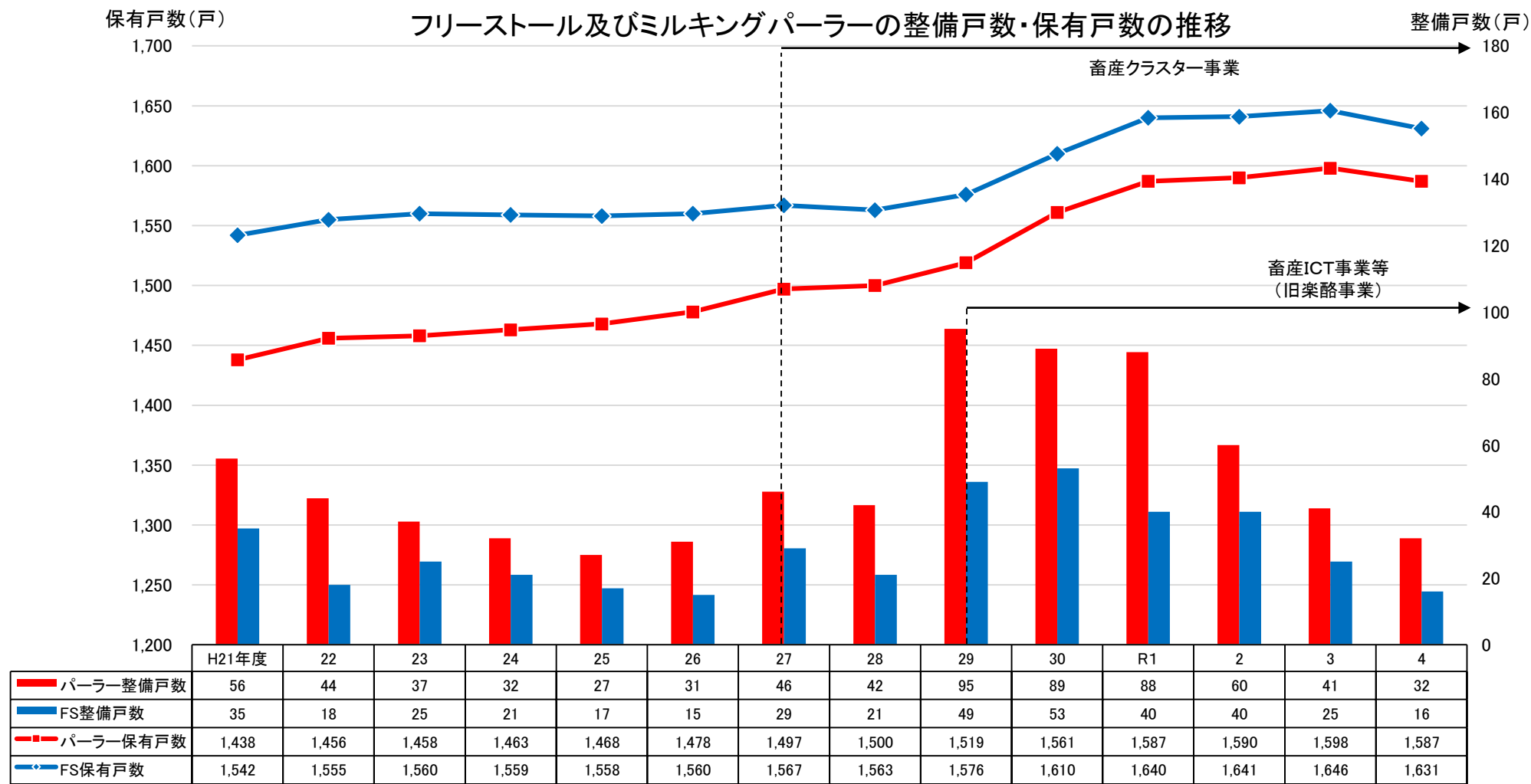


# 6 施設整備(フリーストール・ミルクパーラー)の状況

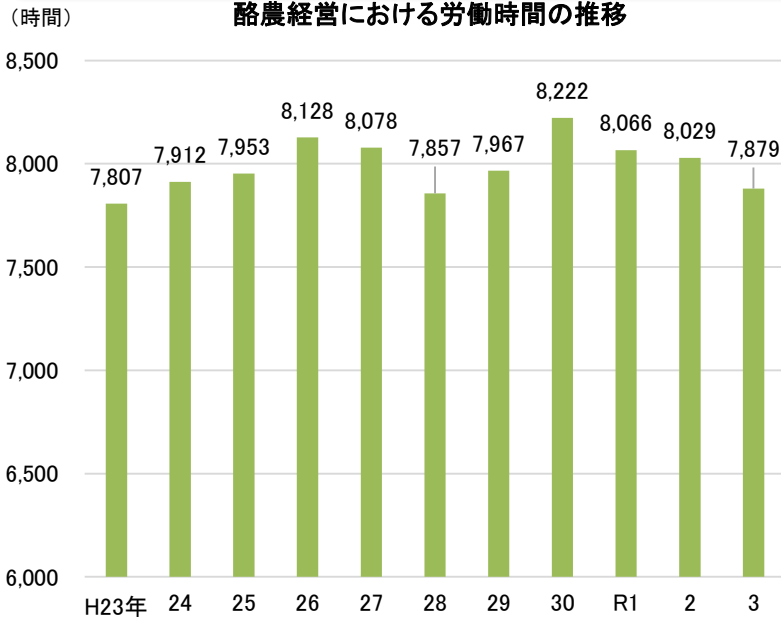
○ フリーストール・ミルクパーラーの整備戸数は、平成27年度(2015年度)以降、畜産クラスター事業や畜産ICT事業等の活用により増加。令和4年度(2022年度)は、離農戸数の増加により、ともに減少。



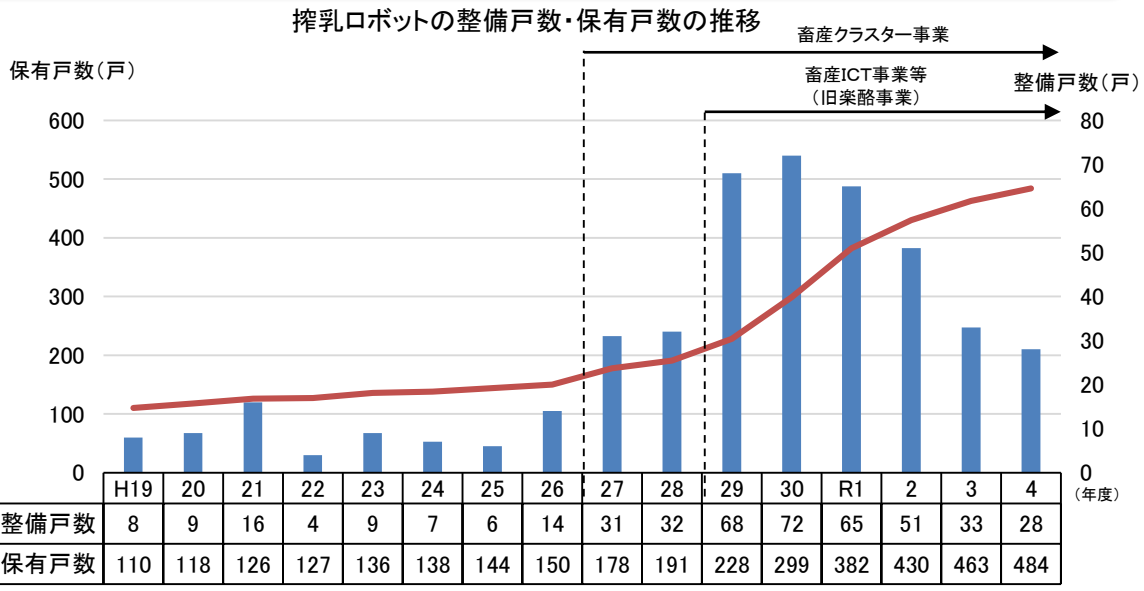
資料：北海道農政部調べ  
 注1：整備戸数は4～3月分で集計。2月1日現在調べのため、令和4年度は令和5年2月1日以降の整備数を含んでいない。  
 注2：保有戸数は、当該年度2月1日現在の戸数

# 7 酪農経営における労働時間と省力化機械(搾乳ロボット)の導入状況

- 酪農経営における労働時間は、令和3年(2021年)で7,879時間。
- 労働力不足への対応などから、省力化機械の導入が進んでおり、搾乳ロボットについては、平成9年(1997年)に道内で初めて整備されて以降、毎年10戸程度で整備されてきた。
- 平成27年度(2015年度)以降、畜産クラスター事業等の活用により搾乳ロボットの整備が加速。1戸で複数台を保有する酪農家も増加しており、令和5年(2023年)2月現在、484戸で搾乳ロボットが稼働。



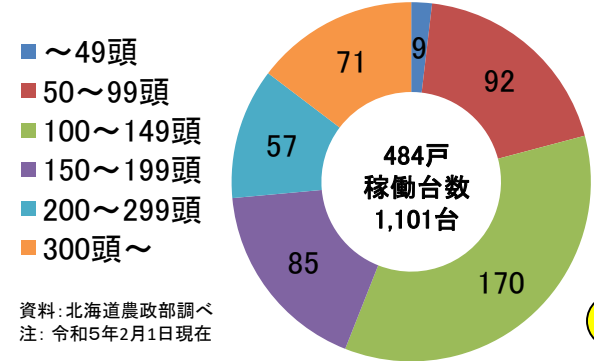
資料:農林水産省「農業経営統計」  
 ※令和元年(2019年)の調査結果は、調査対象区分の見直しを行っていることから、平成30年(2018年)以前の調査結果とは時系列比較出来ない。



資料:北海道農政部調べ  
 注1:整備戸数は4~3月分で集計。2月1日現在調べのため、令和4年度は令和5年2月1日以降の整備数を含んでいない。  
 注2:保有戸数は、当該年度2月1日現在の戸数。



経営規模別の搾乳ロボット保有農家戸数



資料:北海道農政部調べ  
 注:令和5年2月1日現在

# 8 酪農の地域営農支援システムの形成

- 北海道の酪農経営は、離農に伴う経営資源を活用した、個別経営の規模拡大を中心に生乳生産を拡大。
- 家族経営をサポートする酪農ヘルパー、TMRセンター、コントラクター、哺育育成センター等アウトソーシングとしての営農支援システムが発達。
- 地域の複数農家による協業大型法人などの大規模経営体(メガファーム)が生乳生産に占める割合は年々増加。

**■国内の生乳生産量の過半を占め、安定供給に大きな責任と役割**

全国753万t・道425万t(56.5%)(R4年度)、道内生乳出荷戸数4,822戸(R5.2.1)

**■経営の大型化が進展**

1戸当たり搾乳牛飼養頭数106.7頭・生乳生産量1,031t・経営耕地面積86.6ha・農業粗収益13,945万円(営農類型別経営統計(全経営体・R3年))

**■生乳出荷離脱戸数は約200戸/年、新規就農者数は約20戸/年**

高齢化・後継者不足(37.0%)、経営者の事故・病気死亡(11.5%)、負債(8.2%)、将来への不安(4.9%)、労働力不足(2.5%)

**■担い手の高齢化が進展し、約10年間で2割を超える離脱が懸念**

経営主の平均年齢51.6才(H21比 +0.1才) 60代26.2%、70代3.6%  
 経営主50才以上で「後継者なし」の占める割合 18.5%  
 (中央酪農会議「酪農全国基礎調査」(R2年))

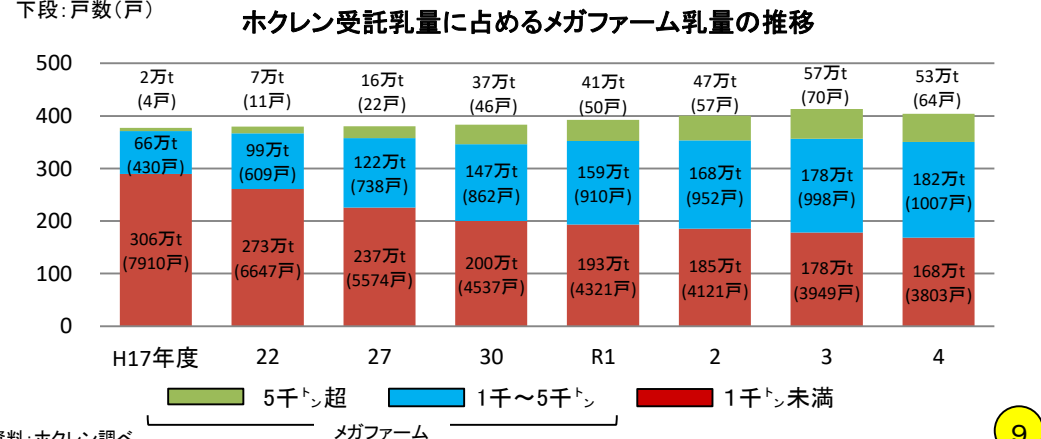
**■農業所得や従事者1人当たり所得は高いが、労働時間が長い**

・農業所得	水田	335万円	<	畑作	1,452万円	<	酪農	2,034万円
・農業従事者	水田	6.62人	<	酪農	6.38人	<	畑作	6.67人
・自営農業労働時間	水田	2,661時間	<	畑作	4,480時間	<	酪農	11,452時間
・従事者1人当り所得	水田	51万円	<	畑作	218万円	<	酪農	319万円
・労働1時間当り所得	水田	1,258円	<	酪農	1,776円	<	畑作	3,242円

(営農類型別経営統計(R3年))

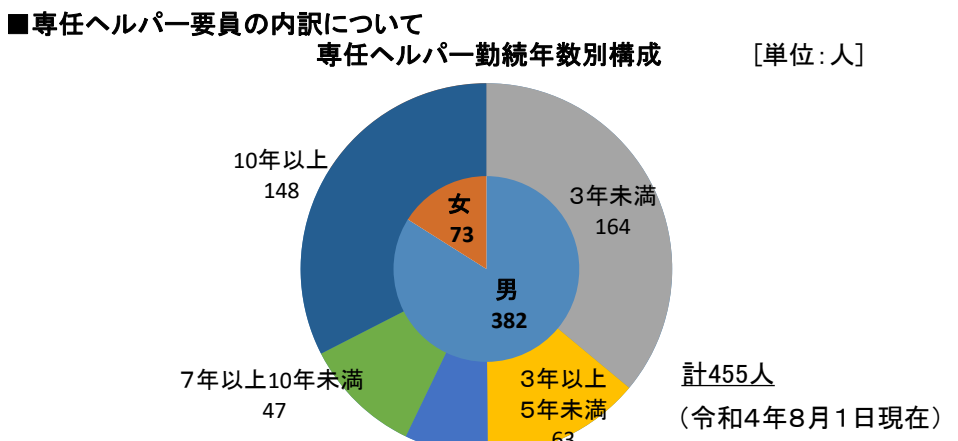
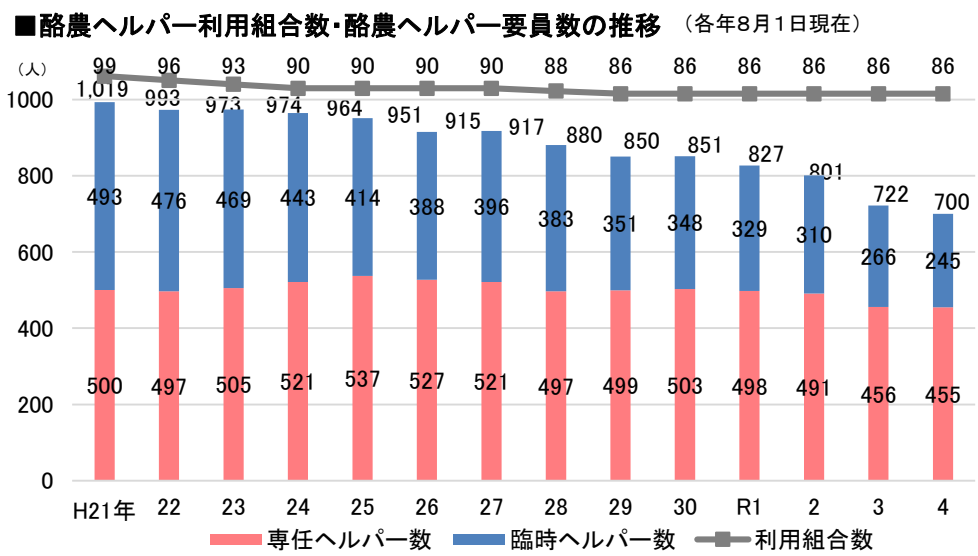
区分	主な機能	搾乳給餌	飼料調製	哺育育成	飼料生産	糞尿処理
酪農ヘルパー	<ul style="list-style-type: none"> <li>■休日の取得や傷病時支援(R4. 8)</li> <li>□利用組合86</li> <li>□利用農家戸数4,590戸</li> </ul>	◎				
TMRセンター	<ul style="list-style-type: none"> <li>■飼料の製造・配送(R3年度)</li> <li>□全道87カ所、構成員740戸</li> <li>□給与頭数126,069頭</li> </ul>		◎		◎	△
コントラクター	<ul style="list-style-type: none"> <li>■農作業請負(R3年度)</li> <li>□全道141組織(飼料関係)</li> <li>□飼料收穫延べ面積178,514ha</li> </ul>				◎	△
哺育育成センター	<ul style="list-style-type: none"> <li>■母牛になるまでの飼育(R4. 2)</li> <li>□哺育専門農家93戸</li> <li>□哺育外部化利用農家954戸</li> </ul>			◎		
公共牧場	<ul style="list-style-type: none"> <li>■乳用牛等の預託育成、採草(R3. 7)</li> <li>□全道228牧場</li> <li>□利用農家戸数(夏期)3,046戸</li> </ul>			◎	◎	△

上段:生産量(万t) 下段:戸数(戸) ◎:主として行う業務 △:副次的に行う場合のある業務



# 9 酪農ヘルパー

- 酪農ヘルパー利用組合の数は、平成29年(2017年)までは組織合併により微減、以降は横ばいで推移。
- 酪農ヘルパー要員数は、専任・臨時ヘルパーともに減少傾向にあり、特に臨時ヘルパーの減少幅が大きい。
- 令和4年(2022年)8月1日現在、専任ヘルパーの勤続年数別構成は5年未満が半数を占める。また、20代を中心に88名の専任ヘルパーが新採用された一方で、95名が退職(勤続3年未満が半数以上)。
- 利用農家一戸あたりの利用日数は、酪農ヘルパーへのニーズの高まりから年々増加。



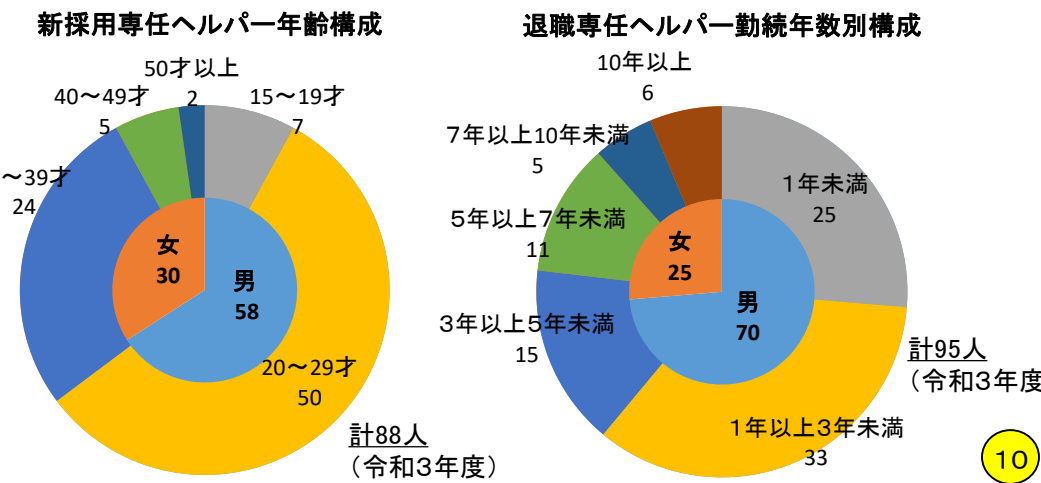
出典 ・ヘルパー関連:酪農ヘルパー利用に関する資料(一般社団法人 酪農ヘルパー全国協会)

■酪農ヘルパー利用状況の変化

区分	乳用牛飼養戸数 A (戸)	利用組合の活動範囲内戸数 B (戸)	利用組合参加戸数 C (戸)	利用組合カバー率 B/A	利用組合参加率 C/B	利用農家一戸あたり利用日数 (日)	ヘルパー要員一人あたり出役日数 (日)
H27年	6,680	6,081	5,507	91.0%	90.6%	22.17	115.49
R3	5,710	5,202	4,741	91.1%	91.1%	24.03	119.45
4	5,560	5,010	4,590	90.1%	91.6%	-	-

Aの飼養戸数:各年2月1日現在(農水省「畜産統計」)  
 BCの戸数は各年8月1日現在 利用日数・出役日数は各年度集計

出典 ・ヘルパー関連:酪農ヘルパー利用に関する資料(一般社団法人 酪農ヘルパー全国協会)

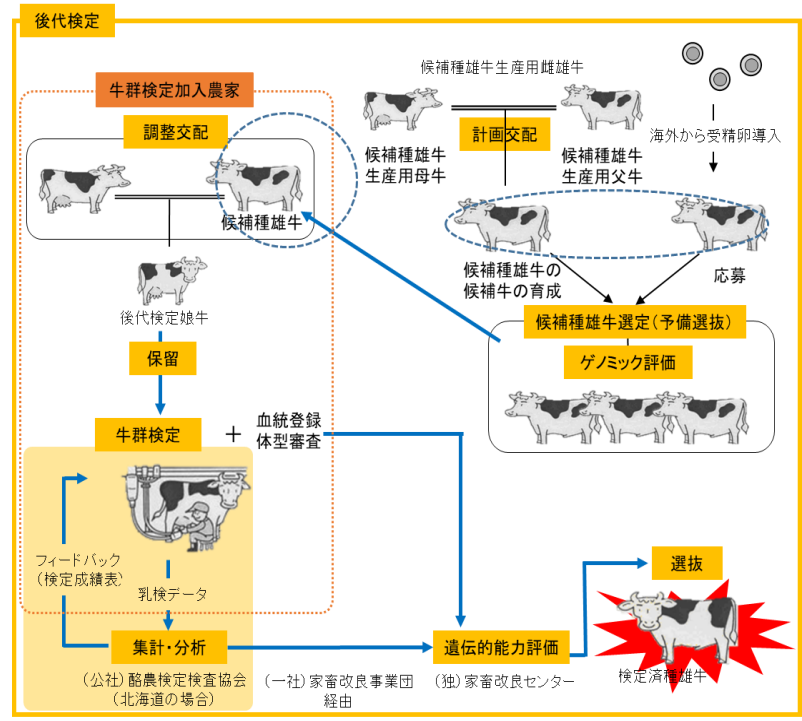


出典 ・ヘルパー関連:酪農ヘルパー利用に関する資料(一般社団法人 酪農ヘルパー全国協会)

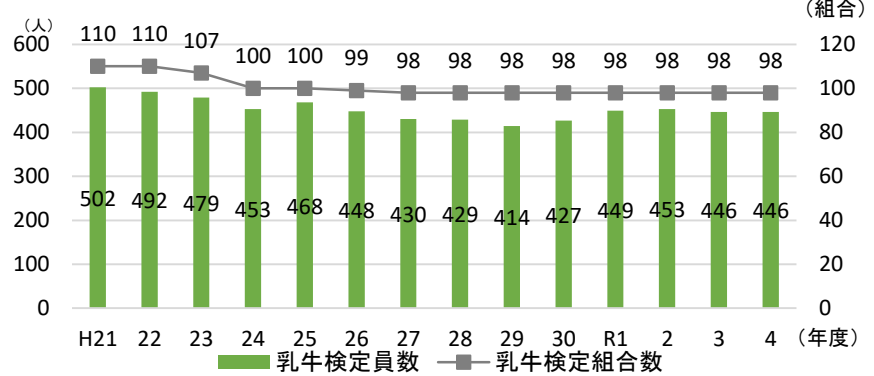
# 10 乳用牛の改良

- 本道酪農の生産性向上を図るためには、牛群検定及び後代検定による乳牛の遺伝的改良は不可欠。
- 牛群検定事業の検定農家普及率は、66.7%。検定牛普及率は、71.8%。
- 経産牛1頭当たりの乳量は、牛群検定加入農家で10,025kgと北海道平均(8,972kg)を上回って推移。
- 乳牛検定組合数は平成27年(2015年)以降は横ばい、検定員数は平成29年(2017年)以降、微増。

## ■乳用牛改良(牛群検定・後代検定)体制

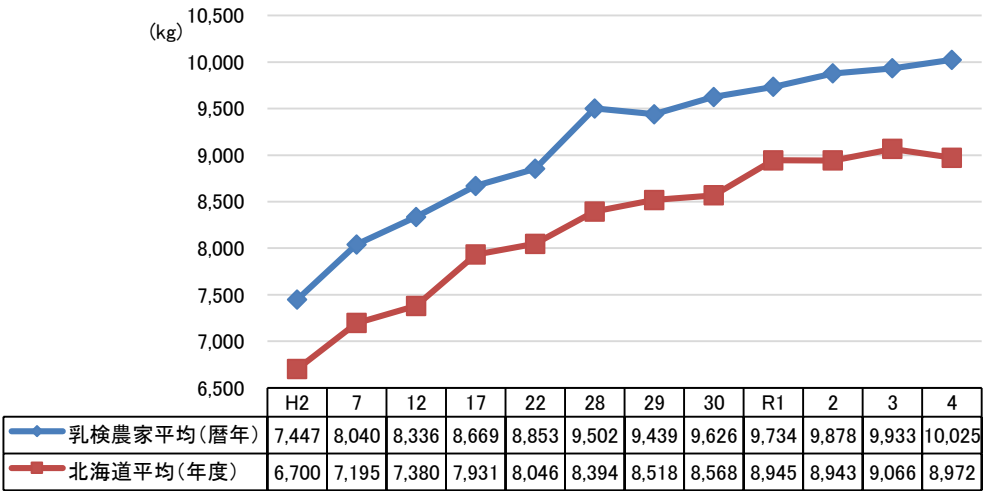


## ■乳牛検定組合数・検定員数の推移



資料: (公社)北海道酪農検定検査協会 調べ

## ■経産牛1頭当たり乳量の推移



資料: 乳検農家乳量は(公社)北海道酪農検定検査協会年間検定成績、北海道平均は農林水産省「畜産統計」・「牛乳乳製品統計」より推計

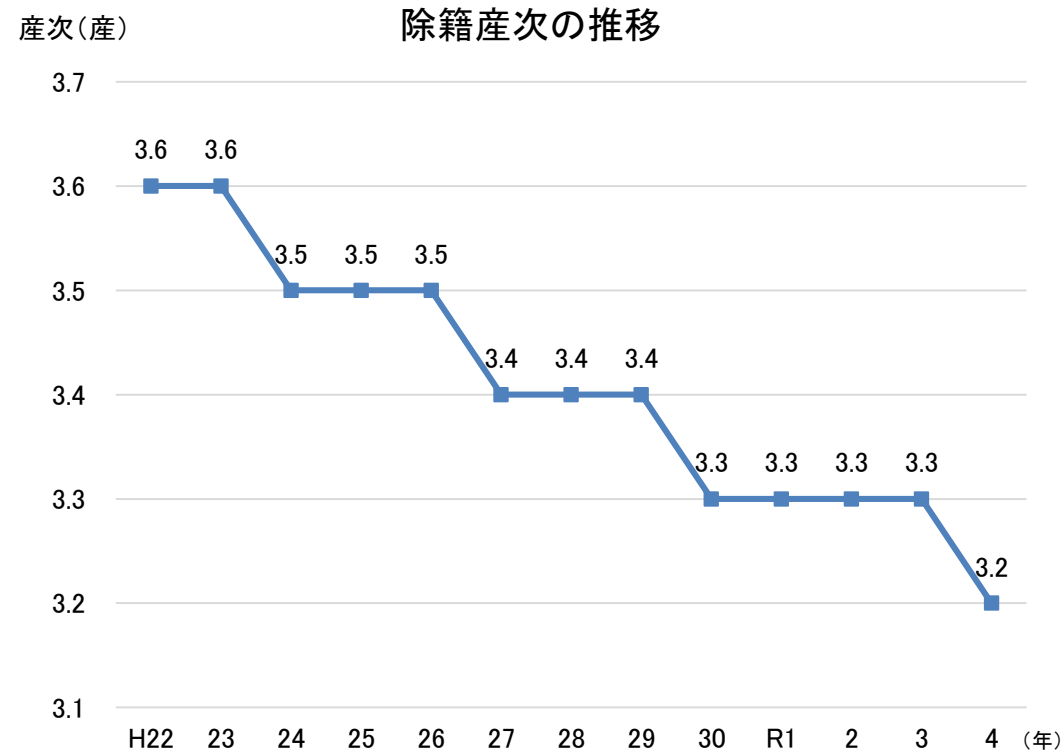
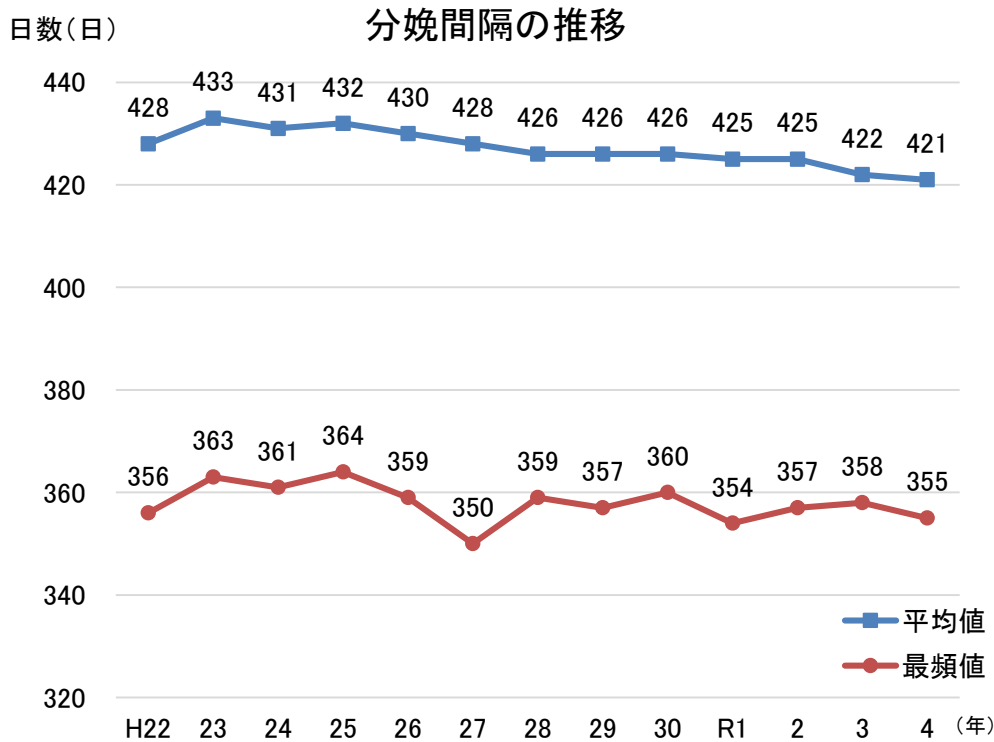
## ■乳用牛群検定事業の実施状況

検定組合数(組合)	加入戸数(戸)	加入頭数(頭)
98	3,601 (66.7%)	345,186 (71.8%)

資料: (一社)家畜改良事業団調べ(令和4年度末現在)  
注: ( )は、成畜(雌牛)飼養戸数及び経産牛頭数に対する普及率

# 11 乳牛の分娩間隔と除籍産次の推移

- 分娩間隔の最頻値は、360日前後と適切なサイクルになっている一方、長期不受胎牛が多いことから、平均分娩間隔は令和4年(2022年)で421日と長期化。
- 除籍産次は、令和4年(2022年)で3.2産と近年低下傾向で推移。



資料: 平均値は北海道酪農検定検査協会調べ。  
最頻値は(一社)家畜改良事業団調べ。

資料: 北海道酪農検定検査協会調べ